

別紙の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- ① 国語の授業で話し合いをする場合、児童や生徒の中に生じる問題とその原因はどのようなものであるとあなたは考えますか。自らの体験に踏まえてまとめなさい。
(小学校・中学校・高等学校のうち、どの校種を対象にまとめているのかを明記してください。)

- ② あなたが、将来、学校で国語の授業をすることになったときに、話し合いの指導において、どのような点を工夫したいと思いますか。①で述べたことを踏まえて、まとめなさい。

全体で、600字以上800字以内で書きなさい。下書き用紙、答案用紙ともに回収します。
(下書き用紙、答案用紙の区別は、左下に記されています。) 下書き用紙は採点の対象にはしません。

話し合いというのは、ほんとうにそれこそ身をもって実際に動き、話さないと指導しにくいことです。どういうふうにすればいいかを言えない子どもは、まず、いません。小学生でも司会者の役目は、ちゃんと言えます。すらすらと五か条くらい言えると思います。それでも実際にやるとなると、なかなかやれません。そのときに、どういうふうにするかという方法を聞いておいても、子どもとしてはどうしようもないものだと思います。「こういうときには、こういうふうに意見を言うのです」などと、ていねいに例をあげて、テープも聞かせて、いろいろとしたとしても、ほんとうにやる力には、なかなかならないと思います。その場になってみると、やり方が分かっている子がほとんど全部であつても、実際にやれる子は、一割もないという状態になるでしょう。

それはどうしてそうなるのか。理解が不十分だとか、教師の説明の仕方がへただとかいうことではないと思います。分かっている、ただ、実際の生きた場で、それこそからだを使って、実際に行動して教えないと身につかないからだと思います。

誰かが発言します。くどくど言っていて、よく分からないとします。「もう少し要点をつまんで、はつきりと言つて」そういうことを言うと、そのとたんに、教室のなかはやや暗くなります。暗いというのは、みんなの口を重くしてしまうということです。話しことばの時間としては大失敗です。みんなの心を明るくいきいきさせないと、口を開くものではありません。

おとなでも暗い気持ちでいる人が、どうして話すでしょうか。とにかく心が暗いと口が重くなつてきて、いま言えばいいなと思うときでも、ちよつとひかえて、そしてだまつてしまつてしまうでしょう。

子どもはもつともつとそうなので、ちよつと天気が悪いということでも、相当な影響を受けるくらいです。小言めいたことをちよつとでも言つと、自分が言われなくても、たちまち教室のなかは潑刺はつらとしなくなつてしまいます。

そういうときに、注意したのではだめですから、子どもの前に立つて、その子のいま言おうとしていることを、教師が要点を押さえて、代わりに話します。そして、「こういうふうに言つてごらん」などと言わずに、つぎへ話をすすめていきます。教師がその時のその子になつて話すのです。

司会者の場合など、注意がどんなにいきとどいていても、子どもはなかなかそのとおりにやれません。「まとめなさい」「はい」「まとめたつもりが、ちつともまとめになっていなかったりします。まして、「新しい問題を提起して方向を転換しなさい」などとむずかしいことを言つても、どうしようもありません。クラスのみんなも何かを体得することはむずかしいでしょう。そういうときには、教師がその子になつて、実演するのがいちばんです。

教室は一種の劇場であるということがあります。教師がその子になつて、その子の言おうとしていたことやなりゆきを見て、すばらしい司会者になるわけです。指導者なのですから、子どもたちの話し合いのすばらしい司会ぐらいできないと、ちよつと字をまちがえたなどということよりは、たいへんまずいことだと思います。すぐれた司会を実演してみせます。そして話がスムーズに進行してきたら、「続けて」と言つて、すつと元の司会者に譲ります。そして教師は子どもの席に座つて、今度は発言者の方に回ります。話し合いの時間は、教師は司会者になり、発言者になり、たいへんです。しかし話し合いは、こうして子どもの身になり代わつて、実際に行動することが大切です。「こういうことを言うんです」ではなく、その「こういうこと」を実際に言つてみせる、これが何よりの方法だと思います。

人と話し合つたり、自分の心を伝える話し方ができるかできないかということとは、以前よりも、ずっと重大なことになってきていると思います。単に、国語ができるとか、そういうこととは違つ、重大なことになっていると思います。その重大なわりに指導されていない。話し合いをさせる教師はたくさんいるけれど、それをきちんと教えている教師は少ないと思います。

